

# 近世浄土真宗寺院本堂の研究（そのⅥ）

## 浄光寺本堂

岡 野 清

### STUDY OF MAIN HALL IN JYODOSHIN SECT IN EDO PERIOD (PART VI)

KIYOSHI OKANO

東海地方における浄土真宗寺院の本堂については大谷派を中心として、すでに5回にわたり、その特色を寺院の規模、寺格とともに時代と相関し乍ら究明し、その推移を辿り得たが、本稿で採り上げたのは津市の専修寺を本山とする高田派の寺院で、江戸中期の中型寺院である。

この派の寺院は東西各本願寺の系統に比して全国的にも数少なく、栃木県芳賀郡付近、北陸地方、愛知県及び津周辺などに限定されるので、調査資料たる対象寺院が寡少であったが、三河地方の中格寺院である岡崎の満性寺を調べたところ、津市近郊の黒田の浄光寺の原形と共通する点を見出し、それが真宗の他系統とは異なる形式を持つものと認められたので、これらに基づいてこの派の本堂形式の特色を探ることとした。

浄土真宗本堂は各派とも近代に至り、同じ形にはご統一され、各派別の特性を見出すことは困難であるが、ここで採り上げた2寺は共に元禄時代に再建された比較的古い遺構であり、他派との差違をはっきり指示することができる。尚本調査は文部省科学研究費の援助を得て遂行した事を記して感謝し、併せて報告としたい。

浄光寺本堂、三重県安芸郡安芸町黒田。

この寺は津市一身田の高田本山専修寺の北方約2軒にあって、もと下野高田の高田派本山が、10世真慧の代に伊勢地方の中心寺院として一身田に寺を建てた頃、すでにこの地にあり、その後この浄光寺の誓祐上人（1435—1521）が当地への本山移転に尽力した功勞者であった。それ以後も専修寺末寺として重要な地位を保ち、今日に及んでいる。

先の本堂が元禄年間に焼失し、現本堂には元禄11年（1698）10月11日の棟札があると言うが、（註）建築様式から見てもこれは妥当と思われる。

境内は小高い丘上にあり、寺域も中級で、本堂は東面する。往時は諸堂を整えていたことが忍ばれるが、現在は城の建物を移転したと言う庫裡と鐘楼のみがある。

本堂は桁行5間（実長11間）、梁間7間（実長9間）、屋根は入母屋造本瓦葺。正面に1間の向拝を付ける。正面と両側面前半に高欄付濡縁を廻らす。堂は内陣廻りは円柱、他は総て面取角柱で、前面及び側面通り1間巾を入側、背面通り1間巾を後堂として、総て堂内側に囲む。残った内部の前面入側の奥2間通り（実長3間半）までを外陣、それより奥の見付5間の内中央の見付3間巾の梁行の円柱列で区切られた内部を内陣とし、内陣を吏に3分して、両端間の背面に脇仏壇を設け、中央間背面に4枚戸をつけて後門とし後堂への通路とする。後門より1間手前に来迎柱を立て、その前に唐様須弥壇を置く。

内陣両脇は余間とし、両余間背面には半間幅の仏壇を各々設ける。又向って右側の北側広縁の突当りから右へ折れて渡り廊下を付け、庫裡へと通ずる（図1）。

堂の正面に付された見付1間巾の向拝には一応の彫刻を飾る。向拝柱下より礎石、礎盤、下部に沓巻を付した几帳面取柱上には絵様付虹梁を架け、左右柱前面には獅子頭木鼻を出し、左右の横に出した象鼻で受けた連三斗、実肘木付で軒桁を受け、桁と虹梁間には中備として臺股2箇を配置すると言う型の通りのものであるが、身舎との繋ぎに架けた水平虹梁の中間に立てた笈形付大瓶束で向拝中桁を支え、それと直交した海考虹梁によって身舎の軒桁へ繋ぐ手法は本山専修寺の御影堂（寛文6年1666）のそれを模している。向拝軒は二軒垂木木舞打、緋破風には兎の毛通しを付し、屋根上両端には獅子の留蓋瓦を載せる（写真1、2）。縁先には凝宝珠柱、登高欄付き4級木階で登る。

堂の外廻りには面取角柱を配列し、正面各間と両側面前端各1間には柱間に虹梁を入れて両端を持送り支え、頭貫上に台輪を通し、虹梁頭貫間に大瓶束を立てる。台輪上の斗拱は実肘木付平三斗で、中備は臺股とする（写真2）。

正面中央戸口（実長3間）では縁長押上に敷居、虹梁

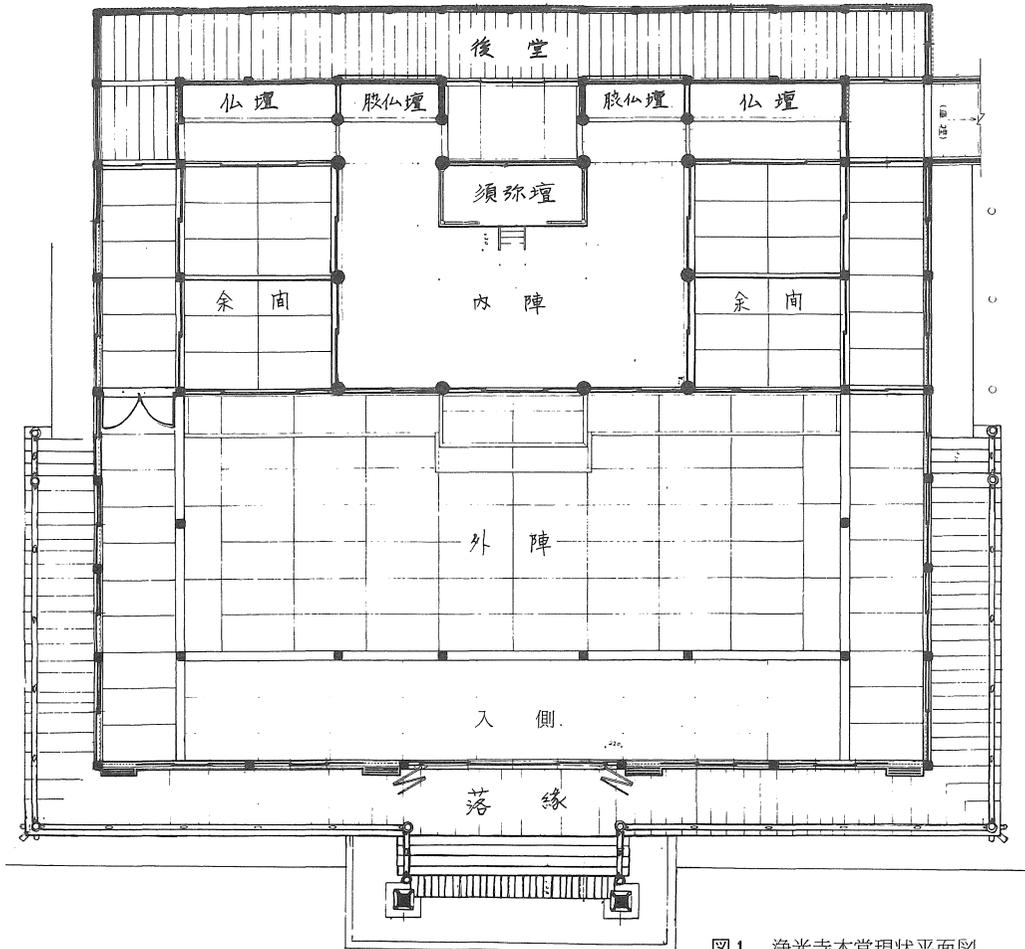


図1 浄光寺本堂現状平面図

下に接して差鴨居を入れ、両脇に方立、脇羽目を付し、三折棧唐戸を釣り、内側に障子4枚を建てる。他の正面各間では虹梁下に束を挟み、差鴨居と敷居間に障子4枚引きとし、今は外に雨戸を引くが、もとは戸4、障子2の3本溝で戸締りした(写真2)。

両側面前端の間では敷居と差鴨居を入れて舞良戸と腰

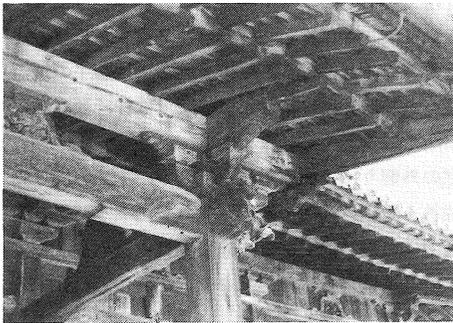


写真1 向 拝 上 部

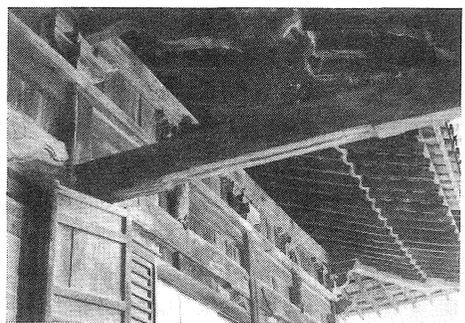


写真2 正面向拝より北上部

高障子1枚の戸締りとし、それより後方では柱上部に虹梁を入れず、頭貫、台輪、斗拱のみを配し、柱間も狭いので斗拱間に中備を置かない。戸締りは敷居と薄い鴨居を入れ、舞良戸2、障子1をはめ、頭貫との間の小壁には飾貫一通りを入れるに留まる。但し前端より3間で濡縁が終り、4級木階で地上に降りる。4間目以後の敷居

は中敷居となり、その下は柱間に縦板張りとなる。軒は向拝同様二軒疎垂木で、木舞を入れる。屋根大棟はのし瓦を高く積み前面に大徳山の文字を刻した瓦を埋め込み、両端是三経巻のついた獅子口ひれ付で飾り、降り棟もの

し瓦を高く積み、両端の妻は巾広い破風板に菡萏魚三箇を付け、妻飾は木連格子である(写真3)。

内部では前面1間(実長1間半)、両側面各1間通り入り側とし畳を敷き込む。その奥の前半外陣、後半に内陣及び余間、背面に後堂を配するが、浄土真宗系の完成された本堂と比べれば入り側が戸締りの外に出て、広縁を造る型をとっておらず、外陣を左右に3分する柱列も、柱列によって造られた矢来内もなく(現在は単に柵で囲って矢来内とする)、したがって、その柱間を繋ぐ虹梁も存在していない。

正側入り側と後堂で囲まれた内側の柱は総て角柱で敷鴨居と内法長押をめぐらして上を小壁とし、外陣正面中央間では内法長押を用いず、無目差鴨居を背違いに高く入れ、その上に丸彫彫刻(松に鳳凰)の欄間を入れる(写真4)。入り側と外陣境の柱は正側とも無目を入れて解放されている。内陣前面には4本の円柱を立てるが、内陣余間境の円柱とそれに対向する外陣表入り側境の角柱間に天井に接して欠眉、錫杖彫付虹梁がかかる。又この円柱は斗拱を差肘木で処理し、天井を貫通して小屋梁を支える構造材となっている。天井は外陣、入り側とも樟縁天井(写真5、6)。これらの外陣内廻りの入り側境では角柱上に頭貫台輪を通し、実肘木付半三斗で天井廻縁を受けて素木のままとするが、内陣と余間前では拳鼻付出三斗を組み、中備には墓股を入れて総て極彩色を施す。又柱間には内法長押を通し、内陣前では背違いに高く入れ、内法頭貫間には内陣前では丸彫彫刻の透し欄間を、余間前では箴欄間を入れる(写真5、6)。

内陣と余間の床は上段となるが、余間の後半は前半より更に框一段高くされ、内陣と外陣との境では框下に蹴込板が入る。内陣前面、余間前面とも鴨居に溝が残り、もと引違いの建具が入っていたことがわかる。両余間の



写真3 堂 全 景

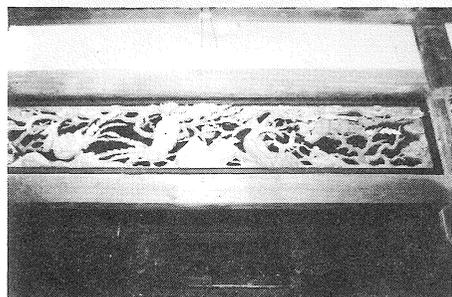


写真4 外陣正面中央間欄間

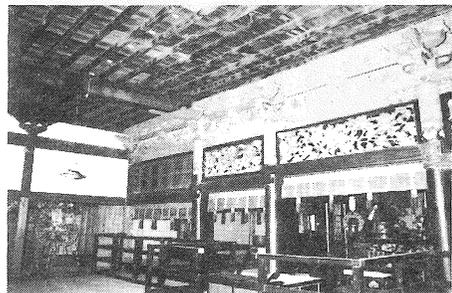


写真5 外陣 全 景

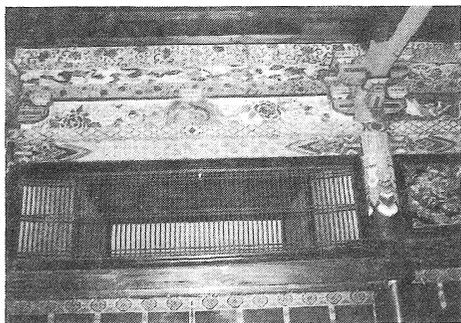


写真6 南余間前上部

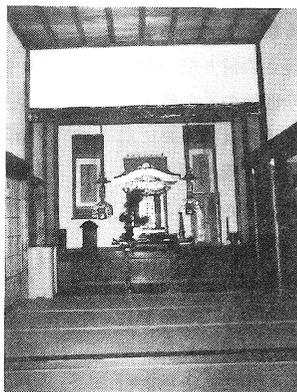


写真7 南 余 間



写真8 内陣南半

内陣境でも内法長押上を小壁とし斗拱は用いず、正面奥の仏壇の半間前には落掛を入れて上を小壁として、棹縁天井を張る(写真7)。仏壇はそれより半間後退して奥行半間、框下に羽目を入れた簡素なもので壇も低い。

内陣では後端両脇に脇仏壇を設け、壇の前面は禅宗様仏壇の線型に透彫りの中帯を入れた装飾をつけ、頭貫下に接して虹梁を入れる(写真8)。脇仏壇前から半間前に来迎柱粽付円柱を立て、来迎柱間と仏壇前隅柱との間を内陣周囲同様に上に頭貫、台輪をめぐらし、柱上には和様出組斗拱を配し、一手先上の通り肘木を内陣の内周に廻らし、柱心上通り肘木との間に支輪を架けてふさぐのに対し、来迎柱上では柱を台輪背だけ切り下げて二手先斗拱に拳鼻、支輪付を載せて相応じる(写真9)。来迎柱間と脇仏壇上の中備には墓段を置き、他の内陣まわりは見返りでは内法は開放で特に建具は入れておらず、両余間より背違いに上げた内法長押上は透彫欄間の裏側となる。その上は見返り両側3面とも頭貫、台輪を廻わし、柱上は拳鼻付和様出組、中備揆束とし、脇仏壇上同様に柱上通りと天井廻り縁を受ける通り肘木間に支輪をかける(写真8)。天井は格天井で格間毎に蓮華文一花を描く(写真8)。来迎壁前には禅宗様仏壇を置く(写真10)。

内陣の彩色については、須弥壇、脇仏壇、来迎柱、虹梁、天井格縁等は黒漆塗を基調とし、絵様の彫りには金箔押し、面、高欄等は朱漆塗とし、柱頂、頭貫から上斗拱までと彫刻等は極彩色で飾る。来迎壁、脇仏壇後壁は金箔押しである。

須弥壇後の両脇仏壇の間は実長2間の後門とし、4本引き障子で戸締まり、巾1間の後堂へ通ずる(図1)。

現状は以上の通りであるが復原すると、元は内陣と余間の床高が外陣と同じであった。その拠所は次の通り。

須弥壇及び脇仏壇が床を挙げた際持ち上げられて、元の取付痕跡が柱に残されている。又現在内陣前面の床框になっている材はそのまま結果として用いられていたもので、結果下の羽目板もそのまま用いられており、両余間境の円柱間の無目敷居は新材であるが、2本溝のある旧材は余間前框に転用されており、長さの足りない部分は別の同材を継ぎ足している。内陣余間境の元の敷居も当然結果となっていた証拠に、現在床下には円柱間に羽目板の板決りが残る。また上部にはもと差鴨居が入っており、結果上に引違い戸が入っていたことがわかる

(現在は鴨居には溝があり、両外から長押で挟んで、内法長押と鴨居のように見せている。写真11)。また、両余間仏壇より半間前通りには現在敷居が入っているが勿論元は30cm程下り、外陣床面と同高になっていた。上部小壁下にある差鴨居(写真7)も50cm程下にもとの取付痕跡があるので、その位置にあって2枚の引違戸で間仕

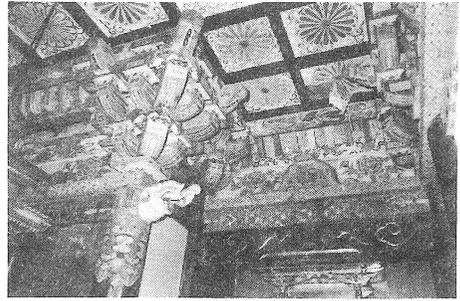


写真9 内陣来迎柱と脇仏壇上斗拱

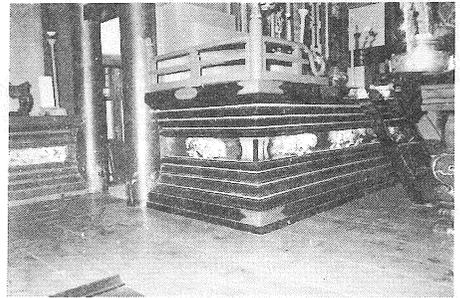


写真10 内陣 仏壇

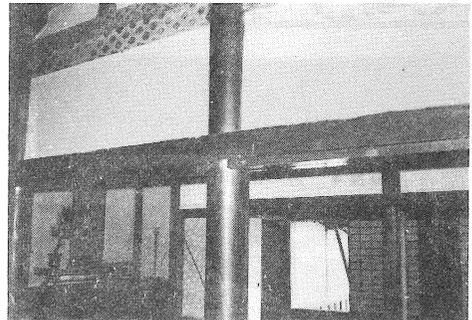


写真11 内陣より北余間を見る

切りされていた(浄土宗寺院に見るように位牌間、余間境の結果は存在しない 図2)。

なお内陣正面中央間の内法長押が現在は長押一段分高くとりついているが、中央長押が切り取られて上に背違いに持ち上げられたため、上下長押とも先に継木されており、元は一直線に通っていたことが知られる。また正面落縁と高欄は現在側面中央辺まで延びているが、元は側面前端1間で終っていたことが柱外面に高欄の取付痕跡が残されていて知られた。従って失われた落縁部分の前端より2間目と3間目は、4間目以後同様の中敷居であったであろう。

このように復原すると、本願寺派の本堂とは全く様子の異なった形態となり、床高に殆んど高低がなく、内陣のみが結果で囲われること、余間の仏壇の半間手前で間仕切られること、外陣の奥行が浅くて、柱列によって左右に3

分されず、元来矢来内は存在しなかったこと、又現在も  
 そうであるが入側を室内に取り込んでおることなど、む  
 しろ浄土宗本堂の間取の系列に近似していることが注目  
 される（図2）。

（註）安芸町誌による。

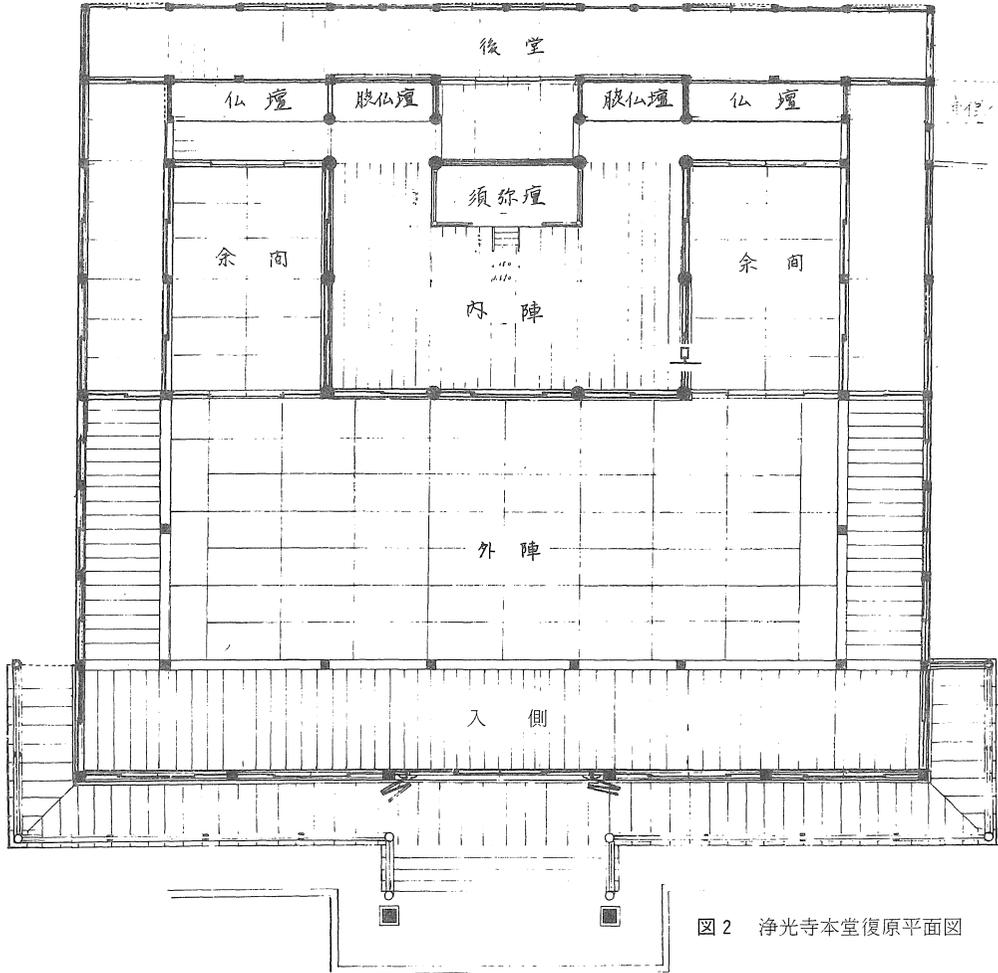


図2 浄光寺本堂復原平面図